

## English Garden 第67話

"Wisdom must live a bitter life."

W.B. Yeats

「英知を求める人生は厳しいのだ」

W.B. イェイツ

前回、英訳された日本の能をご紹介したのに続いて、今回は能の形式で書かれた W.B.イェイツ(1865-1939)の "At the Hawk's Well" ("鷹の井戸")を取り上げます。イェイツは19世紀末から20世紀前半を代表する詩人の一人で、若いころは祖国アイルランドの文芸復興運動の先頭に立ってアイルランドの伝説や民話を題材にして作品を多く書きましたが、後年は思索的な傾向を深め、幽玄で象徴的な作品を書くようになりました。そうしたころアーサー・ウェーリーやエズラ・パウンドの翻訳によって能を知り、「際立って象徴的で間接的な表現の劇」と評して熱烈な信奉者になりました。



「鷹の井戸」の登場人物は、伝説の英雄クファーリンと老人が仮面をつけ、3人の楽土(地謡にあたる)と井戸を守る娘が仮面に似た化粧をしています。舞台は壁の前に屏風がおいてあるだけです。

若いクファーリンは不死の泉を求め、海を渡ってスコットランドにやってきました。上陸後、大きな鷹に襲われたりしながらも、噂に聞いた通り、はしばみの木が3本立っているところに泉らしい岩のくぼみを見つけました。でも、井戸を守る娘は眠っており、居合わせた老人は、自分も水が溢れるのを待っているのだがいつの間にか年をとってしまっ

た、長居をすると呪いを受けるから早く帰るようにと促します。そのとき娘に鷹の精が乗り移り、娘は鷹の鳴き声を発します。老人は、こんな状態のときに娘の目を見つめると、以後愛には憎しみが伴い、自分の子どもを殺すことにもなりかねないと忠告します。老人は、わずかしか出ないかもしれない泉の水を横取りされるのを恐れてもいるのです。するとクファーリンは娘に向かって、決然と次のように言いました。

am not afraid of you, bird, woman, or witch.  
Do what you will, I shall not leave this place  
Till I have grown immortal like yourself.  
(きみなどは怖くない。  
たとえ鳥だろうと、女だろうと、魔女だろうと。  
きみが何をしようとも、ここを離れないぞ。  
きみのように、ぼくも不死の身になるまでは)

そして老人に「たとえ泉の水は数滴でも、二人で分けて飲みましょう」と話します。

少女は鷹のような踊りをしばらく踊り、退場していきます。老人は眠り込んでいます。すると、不死の泉が湧き出てきました。クファーリンは水音を聞きながらも、何かに憑(つ)かれたように娘の後を追いました。老人は目を覚まして井戸の縁に寄りますが、もう水は涸れていました。そして、結局娘に逃げられて戻ってきたクファーリンに、女は彼を井戸から引き離すために誘ったのだと言います。そのとき遠くに関(とき)の声と武器の触れ合う音が聞こえます。クファーリンはいよいよスコットランドの女将イーファアと戦う時がきたと、走って退場していきます。次は楽土の最後の歌からです。

Folly alone I cherish, / I choose it for my share...  
choose a pleasant life / Among indolent meadows:  
Wisdom must live a bitter life.  
(私が好きなのは愚かなこと。それが私にふさわしいから...  
のどかな牧場で気持ちよく生きるのがいい。  
英知を求める人生は厳しいのだ)

いろいろに意味を考えさせられる象徴的な劇です。この劇では、クファーリンは自分の意志で運命に立ち向かっていく勇者として描かれていますが、同時に目に見えない力に動かされていることが感じられます。鷹の精の乗り移った少女に逃げられ、不死の泉にも見放され、最後にはこれも超自然的な女将イーファアに戦いを挑もうとしているのです。結局、英雄である彼に求められるのは単なる肉体的な不死ではなく、生死を超えた霊的な力であるのでしょう。

この劇は1915年に書かれ、すぐにロンドンで上演されました。エドモンド・デュラックによる仮面を使用し、日本から伊藤道郎が出演しています。